

「六本木クロッシング 2010 展：芸術は可能か？」 ポスターのデザイナーを池田享史氏に決定

森美術館（六本木ヒルズ森タワー 53 階、館長南條史生）は、2010 年 3 月 20 日（土）から 7 月 4 日（日）に開催する「六本木クロッシング 2010 展：芸術は可能か？」（※1）のポスターやちらしなどを制作するデザイナーを、公開プレゼンテーションで選考、審査の結果、池田享史（いけだたかふみ）氏に決定しました。池田氏は、本展のポスター、ちらし、チケットなどの広報制作物をデザインし、一連の制作物は 2010 年 2 月に完成、公開する予定です。

森美術館は、今回初めての試みとして、ポスターデザイン・コンペティションを実施し、本展覧会のビジュアルの核となるポスターデザインを、アートディレクターや評論家から推薦された若手グラフィックデザイナー 4 名による公開プレゼンテーションを経て選考しました。



池田享史 | 1975 年 福岡県北九州市生まれ。武蔵野美術大学視覚伝達デザイン科卒、リクルート、大貫デザイン等を経て、'04 年に DESIGNSERVICE 株式会社を設立。'06、'07「きっかけは、フジテレビ。」AD、'09 全日本リ्यूージュ連盟オープンラボ AD、など広告デザインを中心にグラフィックデザインで幅広く活動中。東京オリンピック招致 2016 EXHIBITION 実行委員長。



決定案

コメント:1ヶ月間の制作期間中には、試行錯誤を繰り返した。まだ自分自身で芸術を理解できていないが、キュレーターの方々と話して、勉強を重ねて行きたい。芸術は可能か?との副題がついているが、ポスターに関しても、デザインも可能か?と挑戦して行きたい。

<審査員総評、コメント>

総評：木ノ下智恵子 | 激戦りだったが、「六本木クロッシング」のビジュアルアイデンティティやコンセプト、森美術館の特色に対する、明確な回答のあるデザインであることから、池田氏に決定した。「芸術は可能か?」という問いかけに対する明確な回答としてのエクスクラメーションマークの使用、メディアの可能性や展開の広がり进行评估した。

水野 学 | 世界は高速で動いている。(かのように感じる。)我々は、デザイナーとして、アーティストとして、高速で考え、高速で動かさなければならない。(かのように感じる。)しかも、その重要度もまた高速で増している。(かのように感じる。)

永井一史 | 惜しくも受賞の逃した皆さんにコメントしたい。梅沢氏は、現代美術を崇め奉るものではなく、カジュアルな視点で捉えたことが興味深かった。徳田氏は、「六本木クロッシング」の象徴であり資産でもある「X」を起点に発想を拡げるところが優れていた。古川氏は、主観と客観という概念に着目し、表現に定着したところがユニークであった。

南條史生 | 池田氏の作品は、展覧会であることや、その雰囲気や視覚的に判りやすいところ、コミュニケーション能力の高さから決めた。今後も今回参加して下さったデザイナーの皆さまと仕事をする機会を作りたいと考えている。

【審査員】

木ノ下智恵子 (大阪大学コミュニケーションデザイン・センター 特任講師 / 「六本木クロッシング 2010 展」ゲストキュレーター)、水野 学 (アートディレクター)、永井一史 (アートディレクター)、南條史生 (森美術館館長)

【参加デザイナー】

池田享史 (推薦人: 川上典季子 ジャーナリスト/エディター)、梅沢 篤 (推薦人: タナカノリユキ アートディレクター)、徳田祐司 (推薦人: 廣村正彰 クリエイティブディレクター)、古川哲哉 (推薦人: 近藤一弥 アートディレクター)

(※1)「六本木クロッシング」は 2004 年から開催している、日本のアートシーンの「明日」を見渡すべく、多様なジャンルのアーティストやクリエイターを紹介する展覧会です。3 回目を迎える今回は、「芸術は可能か?」という問いを出発点に、現代社会のさまざまな問題を描くアート、他者との協働やジャンルの横断により、新しい可能性を見せるプロジェクト、ストリートを舞台とする創作活動、新世代の表現など、力強く明日に挑む日本のアートの今を紹介します。

PRESS RELEASE プレスリリース

お問い合わせ 森美術館 広報担当: 渡邊、田村、岡崎 Tel: 03-6406-6111 Fax: 03-6406-9351 E-mail: pr@mori.art.museum
Website: www.mori.art.museum 〒106-6150 東京都港区六本木6-10-1 六本木ヒルズ森タワー

MORI ART MUSEUM

MORI ARTS CENTER